

2012 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:15~14:15 60分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。
6. 設問文にある点数は、満点が100点となるような配点表示になっていますが、国文学専攻の配点は150点となります。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(50点)

一九九〇年代後半になって、貧困化への不安がコウハン(1)な人々を捕らえ始めたとき、「自己責任論」を借用した「負け組」叩きの言説が噴出した。新自由主義という市場万能論——「自己責任」とともに「小さな政府」「民営化」「規制緩和」「グローバル・スタンダード」「自立」といった言葉がそこから派生した。そうした言葉のセットはひとまとめに「改革」と呼ばれた——は、そのためのもつともらしい語彙(2)を提供した。

二〇〇〇年には、金子勝は、世代間格差への不満を語る言葉として、「今のところ、この世代間格差を解消するイデオロギ—として、二十歳代以下の若年世代に提供されているのは市場主義的リベラリズム以外にない」と述べている。確かに、当時の大学生や受験生の論述は、市場原理主義者のそれであった。「自己責任の時代」の決意表明で文章を締めることが、お約束のようでもあった。もちろん、だからといって、彼ら彼女らが、市場原理主義者であったわけではない。批判を語る言葉がそれしかなく、何かをいおうとすればそうならざるを得なかったのである。だが、金子も述べたように、そうした言葉に依拠することは、同時に自らを武装解除してしまうことでもあった。なぜなら、「弱肉強食の論理で連帯するというのは、そもそも言語矛盾」であり、そこには充分に個人化された無力な個人があるばかりだったのである。

おそらく、当時の大学生や受験生は、世代間競争の「勝ち組」である大人たちの口から出た脅し文句を反復していたに過ぎないだろう。それでも、「自己責任論」に代わるものがないというのは、やはり痛々しいことであった。「自己責任論」の論理は、驚くほど素朴な因果論として構成されている。そこでは、ある人の人生における出来事が、すべて個人に内在する要因で説明されてしまうのである。多くの人々がそれなりに「豊か」であるとの思い込みがもてた間はそれでよかったのだろう。「豊かさ」はこの「私」のまっとうさのキケツ(3)であり、またまっとうな「私」は当然「豊かさ」を享受する権利があるという、循環論的な納得も成立できた。もちろん、それは貧者の貧しさは貧者の個人的欠陥に由来するという、貧困を社会問題化させる考え方を抑え込んできた論理の裏返しであったのだが。しかし、状況が変転すれば、この循環論は底なし沼にもなる。お金がないことも仕

事がないことも、「みんな私のせい」なのだ。

現実には「自己責任論」の裏で、若者たちに深く浸透していたのは、心理学主義であった。この「私」の中に「私」の個性を規定する何かが埋もれている、そのような内閉した認識が若者たちを支配していたのである。もちろん、心理学主義と「自己責任論」は、(4)として近似している。それゆえにこそ、若者たちにおいても、「自己責任論」は容易に口にされたのだろう。さらには、「自己責任論」と心理学主義が結合すれば、すべての困難は心根の悪さにあるということになってしまう。今日の大學生が就職活動において嘗める辛酸は、単に就職先がないということだけではない。彼ら彼女らは、就職活動では、どうにもならない「心理」の次元での評価が下されているかのように感覺している。そうして否定されることが、就職活動をいつそう辛いものになっているのである。

二〇〇〇年代の後半になって、勇ましい新自由主義の言葉も息切れし、貧困をまっすぐに論じる言葉が言論空間に浮上するようにもなった。しかし、新自由主義の一時的退却は、その社会への刻印を消去するものではないし、それに代わる言葉の枠組みが見いだされたわけでもない。苦境にある多くの人々は相変わらず自己を苛んでいるし、貧困を個人的要因に帰そうとする論理は今も強力である。社会を見通して「われわれ」の困難の出所を見極めようとか、「われわれ」の生活を安定させていく社会的な仕組みに思いを巡らすとか、そのような構えはなかなか根付くものではない。国家によってくるまれた社会は新自由主義へと舵を切った国家によって打ち捨てられ、外皮を剥がれすつかり (5) されていた人々は社会という拡がりをいまだ見いだせないでいる。

(6) 貧困を個人問題へと帰す論理は、長く根深くあり続けてきた。それゆえにこそ、「自己責任」という言葉が世代をこえて訴求力をもつことも可能だった。「自己責任」以前に、貧者を射た言葉は、「自業自得」であった。それとともに、貧者を「税金泥棒」とみなす言葉もすであつた。しかし、高度経済成長期においては、戦時における総ぐるみにも見えた貧困の記憶は保存されていたし、誰もが努力をすれば「豊かさ」を享受できるという「総中流社会」の神話もあつて、貧しい人々の貧しさを過渡的状态として許容する余地も残された。貧困の克服は、国民的な物語だったのである。それゆえ、ホンネはともあれタテマエに

よって、公共圏における貧者への攻撃は抑制することもできた。

ここで指摘したいのは、戦後日本の「ホンネ」とされるものは本当に「私利私欲」であったのかという点である。戦後の基調をなした「世間並み」を追い求めた欲望は、十分に私化された利欲ではなく「私利私欲」に還元できない共同体性をもっていた。それは、「私欲」というにはあまりにも画一的であった。⁽⁸⁾もし私たちの利欲が十全なる私化を経たものであったならば、社会とその公共性は異なる様相を呈していただろう。そして、欲望は充たされることなく沈殿するのが常である。「ホンネ」の位置にあったものは、おっかなびっくり「世間並み」を演じる人々に抱かれた不安であり、それを埋め合わせる排他的な攻撃性——「自業自得」の論理とここで呼ぶもの——ではなかっただろうか。そして、確かに、「自業自得」の論理は、公的領域（タテマエ）において禁じられていた言葉の、私的領域（ホンネ）における表出としてあったのである。

新自由主義は、このホンネとタテマエの二重構造を勝手に破壊した。ホンネを抑制してきたタテマエは剥き出しの市場原理に置き換えられ、⁽⁹⁾ホンネであった「自業自得」は本来の意味をずらされて「自己責任」と言い換えられた。そうして、それまで私的領域に閉じ込められていた「自業自得」という囁きは、⁽¹⁰⁾あつけらかと公的領域に噴出したのである。それこそが、日本版の貧困の犯罪化であった。

二重構造が偽善的であったということはできるだろう。そして、近代主義者たちは、未完のプロジェクトとしてあったタテマエがホンネをクチクすること、偽善状態の解消を目指したともいえるだろう。しかし、二重構造は、おどろおどろしい「自業自得」という言葉が消去されることによってではなく、「自業自得」の⁽¹¹⁾ というかたちで精算されたのである。

かつての子どもたちの前には、「人間は皆平等だ」というタテマエと競争がすべてを決するということホンネの二重構造が置かれていた。平等を重視してきた公教育のタテマエの裏で、親や塾の講師、ときには学校の教師によっても、ホンネは提示されてきた。競争の勝者だけがいい思いをすることができる、あるいは、敗者は敗北に見合った生活をするようになる、そうした言葉に触れる機会も誰にでもあった。その言葉は、事実認識としては社会の現実の一面を捉えているといえる。しかし、それは、事実認識をめぐる社会学的問題としてはもちろん展開されず、単純な「自業自得」の論理に貫かれた教訓譚として示された。

そうした二重構造の体験は、個々において何を及ぼしたのだろうか。すつきりとソウカツされたのだろうか。おそらくそうではなくて、私たちに何かと言い淀みよどをもたらす力の源泉として内在したままなのだ。

実際のところ、「自己責任」という言葉をつまんだ人々が、市場原理に見事に適合していたわけではなかっただろう。「自己責任の時代」の決意表明を書いた学生たちのように。M・ウェーバーが描いた近代人像は、利用できる条件や手段を計算しながら精一杯に到達可能な目的をたてて、自らの責任によってそれを追求していく合理的存在だった。だが、しかし、それはあくまでも理念的で抽象的な人間像である。どこの誰が状況全体を見事に把握して計算高く利益を引き出す能力をもち合わせていたといえるのか。成功者たちは「それは私だ」というかもしれないが、それは結果論としていえるのであって、「パチスロで月三〇万稼いだ」という自慢との違いがどれほどあるのか実はよく分からない。私たちは「自己責任」を果たせるほどに合理的存在ではなかった。いったい、「自己責任」という言葉が己を突き刺してきたとき、たじろがないでいられる人がどれだけののだろうか。だからこそ、「自己責任」は、自らを律するための言葉としてではなく、他人の破綻はたんや失敗を擲揄やゆしたり、責任を末端に押しつけるための決め台詞ぜりふとして利用されたのである。

(西澤晃彦「貧者の領域」による)

(問一) 傍線(1)(3)(10)(12)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(2)「充分に個人化された無力な個人があるばかりだった」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 二〇〇〇年頃の若者たちは社会を批判的に見る能力を持ちにくかったので、個人の独自性が保てなかった。
- B 個々の人間が集団から孤立してしまったために、個人としての能力を十分に発揮することができなかった。
- C 自分たちが孤立していることに気づかないため、他者とのつながりを積極的に持つことができなかった。
- D 強い者が弱い者に勝つという論理をみんなが持ったために、実際には連帯する力を失ってしまった。
- E 一人一人が他者と闘う姿勢を持たなくなったために、独立した個人としての能力を失ってしまった。

〔問三〕 空欄(4)に入れるのにもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 個人が結果としてとる行動とその動機となる個人の心情を関連づける論理
- B 自己責任を主張する心理の背景には個人を規定する社会の背景があるという論理
- C 自分の中で起こっていることは他者との関係によって決まってくるという論理
- D 外の社会の事件よりも自分の内側のことの方を重視するという内向きの論理
- E 閉じられた自己に内在する要因によって自己と他者のすべてを説明づける論理

〔問四〕 空欄(5)(II)に入れるのにもっとも適当なものをそれぞれ左の中から選び、符号で答えなさい。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

- A 健全化
- B 個人化
- C 全面化
- D 抽象化
- E 犯罪化

〔問五〕 傍線(6)「貧困を個人問題へと帰す論理」と反対の意味で用いられている部分を、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

〔問六〕 傍線(7)「それゆえ、ホンネはともあれタマエによって、公共圏における貧者への攻撃は抑制することもできた」のはなぜか。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 経済成長を遂げて貧富の格差が拡大したため、貧しいことを攻撃してはいけないという意識が強くなったから。
- B 誰もが中流の生活ができるという神話があったために、人々の意識が貧しい人に向けられることがなかったから。
- C 貧困の克服が国民的な課題だったために、それに合致しない人々から目をそらそうとする意識がはたらいたから。
- D ホンネでは貧者を攻撃したいと思っても、それを許さない意識が高度経済成長期以前の社会には育っていたから。
- E 豊かになることが国民的な願いであり、そこから脱落する人を切り捨てるべきではないという考えがあったから。

〔問七〕 傍線(8)「もし私たちの利欲が十全なる私化を経たものであったならば、社会とその公共性は異なる様相を呈していただろう」という表現で筆者が述べたいことは何か。もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 本来一人一人異なるはずの欲求が画一化されてしまったために、その欲求が貧者への攻撃へと向かってしまった。
- B 個人の中にある欲求が十分に個人の願望を反映したものだならば、もっと公共心のある社会になっていた。
- C 個人の「私利私欲」が十分に公共化されなかったために、個人の中の願望は個々の力で追求するしかなかった。
- D 一人一人の中にある欲求が画一化されていなければ、ホンネをもっと直接貧者に向けるような社会になっていた。
- E 人間の願望が本来それぞれ異なっているのに、実際には社会と公共性という概念がそれを画一化してしまった。

〔問八〕 傍線(9)「ホンネであった「自業自得」は本来の意味をずらされて「自己責任」と言い換えられた」の説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分の行為が結果に反映することを意味する「自業自得」が、社会全体の原則であるように使われていった。
- B 自分の行為に責任を持つという意味の「自業自得」が、行為の結果だけを問われる言葉になってしまった。
- C 通常は悪いおこないの報いを意味する「自業自得」が、競争原理を示す言葉として使われるようになった。
- D 本来善悪両方の意味を備えた「自業自得」が、競争社会の中で敗者の責任を追及する言葉になっていった。
- E もともと仏教的な教えを持った「自業自得」という言葉が、現代においてはその宗教性を失ってしまった。

〔問九〕 次のア～エのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものに対してはA、合致していないものに対してはBの符号で答えなさい。

- A 多くの人が豊かと思える時代の「自己責任論」は、社会の状況が悪化するとそれ自体の性格を変えてしまった。
- イ 二〇〇〇年代後半に新自由主義が一時退却したが、それに代わって登場した言論が状況を変えたとは言えない。
- ウ 近代主義者たちは人々の心の中に潜む願望を外に解放することで、社会の二重構造を解消しようとした。
- エ 「自己責任論」は、はじめから「勝ち組」を肯定するためのタテマエとして用意された面を持っている。

二 次の文章は「源氏物語」夕顔巻の一節で、病気で出家した乳母を光源氏が見舞う場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。(30点)

尼君も起きあがりて、「惜しげなき身なれど、捨てがたく思ひたまへつることは、ただかく御前にさぶらひ御覽ぜらるることの變りはべりなんことを、口惜しく思ひたまへたゆたひしかど、忌むことのしるしによみがへりてなん、かく渡りおはしますを見たまへはべりぬれば、⁽²⁾今なむ阿弥陀仏の御光も心清く待たればべるべき」など聞こえて、弱げに泣く。⁽³⁾「日ごろおこたりがたくものせらるるを、やすからず嘆きわたりつるに、かく世を離るるさまにもしたまへば、いとあはれに口惜しうなん。命長く、なほ位高くなど見なしたまへ。さてこそ九品の上にも障りなく生まれたまはめ。この世にすこし恨み残るはわるきわざとなむ聞く」など、涙ぐみてのたまふ。

かたほなるをだに、乳母やうの思ふべき人はあさましようまほに見なすものを、⁽⁴⁾ましていと面だたしう、なづさひ仕うまつりけん身もいたはしうかたじけなく思ほゆべかめれば、すすろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて、「背きぬる世の去りがたきやうに、みづからひそみ御覽ぜられたまふ」と、つきしろひ目くはず。

君はいとあはれと思ほして、⁽⁵⁾「いはけなかりけるほどに、思ふべき人々のうち捨ててものしたまひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひむつぶる筋はまたなくん思ほえし。人となりて後は、限りあれば朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままにとぶらひまうづることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は心細くおほゆるを、⁽⁶⁾さらぬ別れはなくもがなとなん」などこまやかに語らひたまひて、おし拭ひたまへる袖の匂ひもいとところせきまで薫りみちたるに、⁽⁷⁾「げによに思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかし」と、尼君をもどかしと見つける子どもみなうちしほたれけり。⁽⁸⁾

〔源氏物語〕による

注 忌むこと……出家して受戒の儀式を受けること。 阿弥陀仏……臨終に際し来迎する仏。

九品……極樂浄土は上品・中品・下品に分かれ、さらに各品は上生・中生・下生に分かれ、全体で九階級ある。
子ども……乳母の子供たち。 限り……身分的制約。

〔問一〕 傍線(1)(3)(5)(8)の意味として、もっとも適當なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「しるしに」

- A 前兆で
- B ききめで
- C 予想どおりに
- D 目印に

(3) 「おこたりがたく」

- A 治りそうになく
- B まちがいを犯しそうに
- C 怠けることができなそうに
- D 愚かしそうに

(5) 「いはけなかりけるほどに」

- A 言いよりのなかったときに
- B 年老いたときに
- C 生まれたときに
- D 幼かったときに

(8) 「おしなべたらぬ」

- A すべてではない
- B 世間並みではない
- C 非凡ではない
- D ありきたりな

〔問二〕 傍線(2)「今なむ阿弥陀仏の御光も心清く待たればべるべき」とは、どのような心境をいつたものか。もつとも適當なものの中から選び、符号で答えなさい。

- A 往生に執着する気持ち。
- B 死を受け入れようとする気持ち。
- C 往生をあきらめようとする気持ち。
- D 死を恐れる気持ち。
- E 往生への希求と死の恐怖のはざままで揺れ動く気持ち。

〔問三〕 傍線(4)「まして」の後には省略がある。補うべき内容として、もつとも適當なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 「子ども」と「君」を平等に育てたことは
- B 「君」を「まほ」に見なさなかつたことは
- C 「かたほ」である「君」を「まほ」に育てあげたことは
- D 「かたほ」である「子ども」を「まほ」に育てあげたことは
- E 「まほ」である「君」を育てたことは

〔問四〕 傍線(6)「さらぬ別れはななくもがな」を、具体的に平易な現代語に訳しなさい。

〔問五〕 傍線(7)「げに」は、「子ども」が何を「げに」と思ったのか。その内容として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 「惜しげなき身なれど、捨てがたく思ひたまへつる」こと。
- B 「忌むことのしるしによみがへ」ったこと。
- C 「なづさひ仕うまつりけん身もいたはしうかたじけなく思ほゆべかめ」ること。
- D 「背きぬる世の去りがたきやうに、みづからひそみ御覽ぜられたまふ」こと。
- E 「おし拭ひたまへる袖の匂ひも、いとところせきまで薫りみちたる」こと。

〔問六〕 本文の内容と合致していないものを左の中から一つ選び、符号で答えなさい。

- A これまでどおり光源氏にお仕えしたくて、乳母は出家を躊躇ちゅうちよしていた。
- B 長生きして自分の立身出世を見届けてほしいと、光源氏は乳母を励ました。
- C 光源氏は、自分を養育した人たちの中で、尼君に一番親しみを感じていた。
- D 光源氏が成人した後は、それ以前のように頻繁に乳母に会うことはできなくなった。
- E 乳母の子供たちは、光源氏に愚痴をこぼす母を、終始非難がましくながめていた。

三 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)(20点)

夫^レ過^ル者^ハ自^ニ大^ト賢^{ナリ}所^レ不^レ免^ル。然^レ不^レ害^セ其^ノ卒^ニ。為^ニ大^ト賢^{ナリ}者^ハ、為^ニ其^ノ能^ク改^ム也^{ナリ}。故^ニ不^レ貴^バ。

於^テ無^ク過^チ而^テ貴^ニ於^テ能^ク改^ム過^チ。諸^ノ生^ハ自^ラ思^フ。平^日亦^有缺^ク於^テ廉^ニ恥^ニ忠^ニ信^ニ之^レ行^フ者^上。

乎。亦^有薄^ク於^テ孝^友之^レ道^ニ。陷^ル於^テ狡^ニ詐^ニ儉^ニ刻^ニ之^レ習^フ者^上乎。(2) 諸^ノ生^ハ殆^不至^ル於^テ此^ニ。

不^レ幸^ニ或^ラ有^ル之^レ、皆^其不^レ知^ラ而^テ誤^リ踏^ム。素^モ無^ク師^友之^レ講^習規^矩也^{ナリ}。諸^ノ生^ハ試^ミ内^ニ。

省^ム。万^一有^ル近^ク於^テ是^者、固^{ヨリ}亦^不可^ク以^テ不^レ痛^ク自^ラ悔^ミ咎^ム。然^レ亦^不当^ニ以^テ此^ヲ自^ラ。

歎^シ遂^ニ餒^ニ於^テ改^レ過^チ從^フ善^ニ之^レ心^ヲ。但^タ能^ク一^旦脱^ク然^ト洗^シ滌^シ旧^染、雖^モ昔^ハ為^リ寇^盗、今^ニ。

日^ハ不^レ害^レ為^ニ君^子一^矣。若^シ曰^フ吾^昔已^ニ如^ク此^ノ、今^雖改^レ過^チ而^テ從^フ善^ニ、將^モ人^ノ不^レ信^セ我^ヲ、

且^モ無^ク贖^ニ於^テ前^過、反^ッ懷^キ羞^ニ浚^ニ疑^ミ沮^ニ而^テ甘^ク心^ヲ於^テ汚^濁終^ニ焉^{ナリ}、則^チ吾^亦亦^ニ。

望^ミ爾^ノ矣^{ナリ}。

(王守仁「教条示龍場諸生」による)

(4)

注 諸生……門人たちへの呼びかけ。 儉刻……軽々しくて薄情であること。 規飭……いましめること。 悔咎……

過ちを悔いること。 自歎……自分自身に不満を持つこと。 餒……損なうこと。 旧染……以前からの、よくな

い傾向。 寇盜……盗賊。 贖……償うこと。 羞澁……恥じらい、ためらうこと。 疑沮……感情的な妨げ。

〔問一〕 傍線(1)「卒」の読みを、現代仮名遣いにより送り仮名も含めてすべて平仮名で書きなさい。(平仮名以外に何も書かないこと)

〔問二〕 傍線(2)「諸生殆不_レ至_二於此_一」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 君たちはたぶんこういう状態にはなっていないだろう。
- B 君たちはたぶんこれほど信頼されることはないだろう。
- C 君たちはたぶんこういうことまで考えはしないだろう。
- D 君たちはたぶんこれほど不幸であることはないだろう。
- E 君たちはたぶんこういう場所に来ることはないだろう。

〔問三〕 傍線(3)「万_一有_レ近_レ於_レ是_レ者_一」は、「まんいちこれにちかきものあらば」と読む。これに従って、解答欄の原文に返り点を付けなさい。(返り点以外に何も書かないこと)

〔問四〕 空欄(4)に入る文字としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 過
- B 展
- C 貴
- D 絶
- E 懐

〔問五〕 本文の主旨としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 過去に悪事を働いた人物が立ち直るには、周囲からの信用が必要である。
- B 新しい自分になることを目指す場合、本人の心構えが重要な意味を持つ。
- C 人間は、自分自身に対して不満が生じていると、不幸だと感じてしまう。
- D そもそも、ほんとうに偉大な賢者は、ひどい失敗などしないものである。
- E 他者が自分のことを信頼してくれない時、深く反省しなければならない。

